

いもう 葦毛通信



平成 27 年 12 月 1 日
豊橋市文化財センター
TEL : 0532-56-6060

No. 31

1、2015 モニタリング報告-9

ソバリンドウ

葦毛湿原では花の季節が終わろうとしています。シラタマホシクサの花も枯れてドライフラワーのようになっていきます。昨年バックホーによる作業で抜根とネザサの根の層を除去したC地点では、アカメガシワの葉が黄色く色づいています。今年の作業で、アカメガシワやカラスザンショウは除去して草地を維持していく予定です。



C地点 (11月17日)

C地点は、作業前は森だったところでした。写真の右下は、林縁部でネザサ群落だったところでした。

根の層を除去したところ、トウカイコモウセンゴケが数多く発芽しました。現在は種子を付けています。トウカイコモウセンゴケは、ある程度土が残り、やや乾燥気味のところが好きなようで、数十株が集中する群落が作業後の場所でいくつも見られるようになりました。葦毛湿原では、特に注意せずに作業しても、絶滅の心配は無いようです。



トウカイコモウセンゴケ (11月17日)

これ以外には、ミミカキグサとホザキノミミカキグサが花を咲かせています。かなり背は低くなっていますが、例年、霜が降りる頃まで咲いています。また、今年は11月に気温の高い日が続き、季節外れの花がわずかに咲いています。スイランやミカヅキグサがわずかに残り、L地点では、春に咲くフモトスマレが開花しています。



ミミカキグサ



ホザキノミミカキグサ



スイラン



ミカヅキグサ

(2015年11月17日撮影)

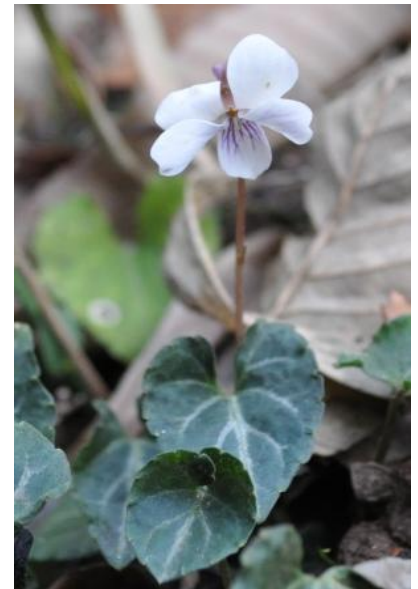
2、平成27年度作業報告ー1

これまで、作業報告は中間報告としてきましたが、植生回復作業は11月から3月まで行っているため年度別の作業報告として記載していくことにします。

今年度の作業は、L・M地点の抜根した根を積みあげたところの整理とV地点の三の沢から始めました。

L・M地点

L・M地点の抜根した根の山は、太枝切り鋏やのこぎりで根を切って根が抱きこんだ石をはずし、土を落として運び出しています。焼却処分するためには土や石が残らないように丁寧に処理する必要があります。この根の山の中から、アズマヒキガエルとマムシが出てきました。冬眠のために絶好の場所になっていたようです。いずれもヒゲ根に土が溜まったところにいました。これから、他の根の山も処理して行くの



L地点のフモトスミレ
(11月21日撮影)



V地点作業風景



根の山の中のアズマヒキガエル

で、特にマムシには注意して作業を行いたいと思います。

冬眠する動物にとっては、ヒゲ根に溜まった土や落ち葉のような環境が好都合のようなので、今後もバックホーで抜根作業をする時には、動物の冬眠用にこのような環境を造っておくことも必要なことかもしれません。

V地点

V地点の三の沢は湿原南東部にあり、上流は国有林です。国有林内の湿地にはミカワバイケイソウの大きな群落があり、葦毛湿原と同様に数多くの湿性植物が見られます。三の沢の湿地は、国有林内にわずかに残っていましたが、周りから木やネザサが侵出して狭くなり、日照も少なくなっていました。指定地内の湿地との間の沢は、沢沿いの湿地部分のほとんどが木に覆われ森になっていました。今年の6月には、愛知森林管理事務所により間伐が行われ、国有林内の湿地はかなり日照が確保されるようになりました。この国有林内の湿地と指定地内の湿地の間にある木を切って、沢沿いの湿地を復元して、愛知森林管理事務所と協力しながら、今後一体のものとして管理できるように三の沢の木の伐採を進めています。

木の伐採作業はチェーンソーを4台使い、2班に分かれて作業を進めています。木の伐採は、搬出しやすいように下流から始め、上流に向かって進めています。大きな木は、切り倒してから枝を払って、太い枝は50~60cmの長さに切り、薪として利用しやすい長さにしてから搬出しています。太い幹は玉切りして短くしますが、今年は、豊橋市自然史博物館の学芸員からの要望で、昆虫観察用に太い幹はできるだけ長くして現地に残すようにしています。もちろん湿地内ではなく、周辺の森との境に置いています。

切った枝は、太いものはチェーンソーで50~60cmの長さに切って太さ2分(6mm)の藁縄で縛り、葉の付いている部分は太枝切り鋏で短く刻んで藁縄で縛って、背負子に積んで運び出しています。刈り取った草や枯葉等は、自立式の袋に入れて、そのまま運んだり、背負子に積んで運んでいます。藁縄は、2m程度の長さであらかじめ準備しておく、木や枝を縛ったまま湿原出口の一か所に集めておき、月1回パッカー車でまとめて搬出します。積み込む時に藁縄をはずして縄は再利用し、数回使って弱くなった縄は縛ったままパッカー車に積み込み、そのまま焼却処分します。パッカー車による搬出は1回が900~1,200kg程度の重量で、一日3回行います。

背負子は自作しているので、メンテナンスが楽にできます。今年度の作業前に、本体のゆるんだ部分にくさびを入れ、外れた背板を固定し、割れた部材を交換して補修しましたが、作業には、時



太枝切り鋏による枝切り



藁縄の準備



背負子による搬出

間も余りかかりませんでした。今年で3年目ですが、予想以上に丈夫なようで、補修すれば10年程度は十分に使えそうです。

葦毛湿原では、植物の知識が豊富な方3名に葦毛湿原調査員を委嘱して、植生回復作業に協力していただいています。具体的には、葦毛湿原調査員に、木の伐採作業の前に切らない木や希少種のあるところに印をつけてもらい作業時に注意しています。

印は黄色いテープを使い、草本は自生範囲を細いテープで囲い、木本は幹に幅広のテープでラベルを貼り、種名を書いています。写真の中央で四角く囲っているのはカザグルマの自生範囲、その右上の地表に直接貼ってあるのはイワタカンアオイの自生地点です。木はシラキとガマズミです。



地表に設置したラベル



立木のラベル（シラキ、ガマズミ）

現在作業を行っているのは、森林化した部分なので、現在の湿地中心部と異なり絶滅危惧種が多くあるわけではありませんが、葦毛湿原では少なくなった植物や昆虫が集まる植物（虫媒花植物）、種子を鳥が食べにくる木等の、動物にも配慮して残す木を決めています。

森林化した三の沢の内部を歩くと下草はまばらで地表には礫が露出し、落ち葉は溜まっていますが表土のあるところはわずかです。水の流れは地表に出たり、地中にもぐったりしながら指定地内の湿地に向かって流れています。地表面が湿っているところは湿地として復元できる場所なので、この部分は一部の木を残して基本的に皆伐し、さらに湿地として復元できる部分の日照を確保できるように木を切る範囲を考えて作業しています。

今年の作業は、このように木を切るということが中心ですが、昨年のバックホーでの作業結果から木を切ただけでは良好な湿地に戻らないことが分かりました。そこで、来年度は、またバックホーを使って抜根作業とネザサやコシダの根の層を除去する作業を行うつもりです。せっかく、重機を入れるのですから、今年度の作業でできるだけ多くの木を切って湿地と草地に戻せる部分を確保するつもりです。三の沢から一の沢に向かって作業を続けますが、予想以上に木を切る量が多く、作業は一の沢まで進まないかもしれません。